

第61回常会 一般質問 旦保立子

見えてしまうものに
目をつぶる
聞こえてくるものに
耳をふさぐ
臭ってくるものに
鼻をつまむ
心はときに
五感を裏切り
六感を信じない
心はときに
自らを偽っていることに
気づかない

谷川俊太郎「心は」より

自らを偽らず、五感と六感をとぎすましての答弁を期待して、四つの質問に入ります。

一つ目です。女性室がなぜ真宗教化センター正面入り口のプレートに刻印されていないのか。

96年開室以来、20年間大玄閣奥という分かりづらい場所にあって、男性(ひと)と女性(ひと)が開かれていく方途を探り、内外に向かって広報誌・寄合談義等で表現されてきました。そして、今、真宗教化センター開所にあたり、あらゆる人々に場を開く窓となることを思う時、当然、宗務行政機構という枠を越えて女性室の存在を外に向かって明らかにせねばならないと思います。

二つ目です。真宗大谷派所属団体としての坊守会連盟と大谷婦人会への予算措置と機構上での宗門組織の関与はどのようになっているのか。又、その根拠は何か。さらに、法規総覧に文字化されている「所属団体」の定義はどのように了解されているのか。

法規における「所属団体」という曖昧模糊とした言葉によって、組制、宗務等の権限を持つ地位の方から、時に圧力をかけられ、従属を強いられることを聞きます。いかなる理由があっても、それぞれが独立し、尊重されねばなりません。権限を振りかざして、他者を貶め、物言わせぬ行為は見過ごすことはできません。解釈も定まらないこの言葉にもかかわらず、その言葉を盾に悲しみの人を生み出してはならないのです。

また、同じ組織部所属でありながら、大谷婦人会は真宗教化センター入りをし、坊守会へは事前に「センターに入りますか、入りませんか」という問

い合わせがあったと聞きます。なんとも、意欲と緊張感の感じられない応対にほんとうに、この真宗教化センター設置の願いは何なのかと思わざるをえません。いよいよ、これからの真宗教化センターの実働内容を注視していかねばなりません。

三つ目です。男女平等参画推進における組門徒会女性会員選定に消極的であると考えられる具体的理由は何であるか、総長演説の中の「慣習」以外の理由を示して下さい。

真宗同朋会運動が提唱されて54年、とはいえ、その間、女性差別事象は糾弾の中にありました。しかし、96年1月に宗務審議会「女性の宗門活動に関する委員会」から答申が出され、同年5月にはその全文が「真宗誌」に掲載、2000年初版の真宗同朋会運動学習資料集に所蔵されたことに、喜びを隠せなかったのを思い出します。それから20年、ここにきて、またぞろ、「女性参画によって今まで築き上げた男性のつながりの伝統がくずれてしまう」「企画運営や議決機関には衆望のある人でなければならない」等の、いわゆる古い宗門体質が浮き彫りにされ、全推協叢書の差別事件を彷彿といたしました。

真宗同朋会運動が隔々までいきわたらなかったことを思わざるを得ません。単に、30割の比率で女性参画を果たした教区には助成金を出すといった小手先の措置ではすまないものを感じます。

この男女平等参画推進を願い、時限立法であっても宗門を条例制定に動かしたのは、とりもなおさず、長い時間をかけての女性たちの声であることを忘れてはならないと思います。

最後に、大谷派と中国の関係をどのように考えているかをお尋ねいたします。

大谷派と中国は大谷潤氏から密接な関係にあったと聞いています。そして、今も、その歴史を問いながら、南京大虐殺の事象を縁に、中国の方々と丁寧な関係を28年に渡って続けられている方が宗派内におられます。現在の日本という国を思う時、ややもすれば、中国を敵国とみなし、軍備の正当化を主張しています。だからこそ、私たちは中国をはじめとするアジアの人たちに眼を注ぐこと、まさに大谷派ができる安全保障制度を構築していくことが、真宗教化センターの一つの方向性であると考えます。

発言の場をありがとう。